

令和4年度入学試験問題（学校推薦型選抜Ⅰ）A

# 小 論 文

（初等教育教員養成課程）

## 注意事項

1. 解答は、すべて別紙解答紙の指定の箇所に横書きで記入すること。
2. 解答紙には必ず受験番号を記入すること。

〔問〕 つぎの文章を読み、あとの問いに答えなさい。

ひとしく問題解決や学習の場で学び手を助けるといっても、他者つまり人間と、機械などを比べてみると、そこにはいくつも違いがあることがわかる。

とくに重要なのは、人間は機械に比べずっと柔軟で、学び手の必要に応じて最小限の援助だけを与えることができる、という点である。つまり、学び手がまだ未熟なうちはそれだけ大きな援助を与えるが、彼が次第に知識を蓄え、技能を発達させていくにつれ、それだけ援助を少なくしていくといったことが可能なのである。こういった柔軟性は、「知的」な機械であるコンピュータの場合にもまったくないわけではないが、それ以外の機械ではほとんど期待しえないであろう。

表現をかえると、獲得すべき知識をすでにもっている他者は、「コーチ」として学び手を導くことができる。より具体的には、(1)まずやり方のお手本を示す、(2)学び手がそれをまねて活動する際に、不都合な点や困難があれば、そこで簡単なヒントや助言を与える、(3)彼が成長するにつれて、こうした助言やヒントを次第に少なくしていく、ということができるのである。

このように他者の与える柔軟な援助の結果として、学び手は、そもそものはじめから比較的有能である——つまり問題を解く、作業を遂行する、など目標を効果的に達成することができる。同時に彼は、次第に知識や技能を獲得することによって、独力でもその問題を解くことができるようになっていくのである。

とくにこの(2)、つまり学び手のふるまいに問題があるときに限って適切な助言やヒントを与えるというのは、他者が、学び手の内的な処理過程を診断しうる、高度に知的な存在であるからこそ可能なことであって、ここまでの能力を機械に期待するわけにはいかない。(テスト項目への反応に従って、助言やヒントを、枝分かれしたプログラムの形で与えることまでは、今のコンピュータでもできるけれども。)

学習環境としての他者の強みはこればかりではない。学び手本人に比べ、他者がより進んだ知識を持っていない場合でさえ、彼らは学び手の学習を促進することができる。

たとえば、学び手が持っているのとは違った視点から問題を眺めてみるとか、あるいは学び手のやり方に対してある種の批判を加える、といった形で、問題に含まれる

隠された制約条件をはっきりさせたり、無視されがちな制約条件に注目させ、解釈・仮説の探索を適切に方向づけていくことができる。制約条件のなかには、それに違反しても気づかず、正しくない解を選んでしまったり、無益な探索をくり返す、といったものも少なくないからだ。さらに、ただ単に学び手のさまざまな試みを「見守っている」というだけでも、彼のいっそうの知的努力を動機づける、つまりその能動性を増幅させるということがあるかもしれない。

1930年代に若くして死んだソヴィエトの大心理学者ヴィゴツキーが、精神発達において、ある社会・文化の有する知識が、その社会のより成熟した成員を介してより若い成員へと受け渡されていく、という過程を重視したことはよく知られている。彼の理論は、最近ますます注目され、とくに子どもの学習を促進すべきコーチングの考え方の基礎となっている。

一方、これと対照的に、スイスの大心理学者で、認識論学者でもあったピアジェの場合には、より未熟な成員も含めて、自分とちがった視点や前提をもつ他者を説得したり、彼らに教えようと試みるなかで、学び手の知識がより明確になり、よりよく体制化されていく、という側面を強調した。

ただし、この二つの過程は、決して背反的なものでなく、日常生活で学ぶ際には、ともに生じているにちがいない。いいかえると、人びとが日常生活のなかでよく学ぶことができる大きな理由のひとつは、すぐれた (ア) とともに暮らしているということがある、と考えられる。

出典：稲垣佳世子・波多野誼余夫（著）『人はいかに学ぶか』中公新書、1989年、pp.118-121.

(問1) 空欄  に適切な言葉を、10～15字で答えなさい。

(問2) 小学校における望ましい学習集団とは、どのようなものであると考えるか。そして将来、あなたは小学校教員としてどのようにその学習集団づくりをおこなっていくか。課題文の内容をふまえ、自己の考えを450～500字で述べなさい。

令和4年度入学試験問題（学校推薦型選抜Ⅰ）B

# 小 論 文

（初等教育教員養成課程）

## 注意事項

1. 解答は、すべて別紙解答紙の指定の箇所に横書きで記入すること
2. 解答紙には必ず受験番号を記入すること

【問】 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

人はライフコースの場面によって帰属するコミュニティが変化していくものである。子ども時代は地域や学校というコミュニティに帰属し、成長するにつれて大学や会社というように、地理的に育った家から離れたいくつかのコミュニティに所属するようになる。自分の家庭を築き、やがて仕事をリタイアすると、少なからぬ人が住まいのある地域コミュニティで何かしら活動をするようになる。—————というように、当たり前に使っているこの「コミュニティ」とは何だろうか。

アメリカの社会学者マッキーヴァーは、「コミュニティをコミュニティたらしめている基礎」には、「地域性」と「コミュニティ感情」があると言っている。「コミュニティ感情」には、そこに帰属している者が共有する「われわれ感情 (we-feeling)」、そこに自分の果たす役割があるという「役割感情 (role feeling)」、お互い様で支え合っているという「依存感情 (dependency feeling)」の3つのレベルがあるという  
マッキーヴァー ページ  
(MacIver/Page 1952)。

また、社会学者ヒラリーは1950年代に94種類のコミュニティ概念を調べた結果、そのほとんどが、社会的相互作用 (social interaction)、領域 (area)、共通の絆 (common ties) を挙げている点で一致していたという  
ヒラリー  
(Hillery 1955)。

その後、1990年代に入ると、「コミュニティ」を構成する要素のうち地理的空間については、特に都市部の住民においては感覚が薄れているという研究も多く発表されるようになった。一方で、コミュニティの成員が持つ異なる背景や「多様性」が重要な要素であるという主張や実証的な研究も多く発表されるようになってきた  
ウェルマン ほ か  
(Wellman, *et al.*)。こうした数多くの議論を踏まえて、マックイーンらは、「社会的絆によってつながり、見方や考え方を共有し、地域等の場において共同活動に従事している多様な特徴を持つ人々の集団 (a group of people with diverse characteristics who are linked by social ties, share common perspectives, and engage in joint action in geographical locations or settings)」を、コミュニティの共通定義としている  
マックイーン ほ か  
(MacQueen *et al.* 2001)。

一方我が国では、広井良典氏が、「人間が、それに対して何らかの帰属意識を持ち、かつその構成メンバーの間に一定の連帯ないし相互扶助 (支え合い) の意識が働いて



